

『去来抄』私論

いささか唐突だが、『去来抄』はある意味で『犬夷評判記』に似ている。『犬夷評判記』とは、曲亭馬琴の読本『南総里見八犬伝』と『朝夷巡島記全伝』における、馬琴と読者の評答をおもしろおかしく構成し直したものである。基本的には評者が作品の部分部分について講評し、それに対して作者馬琴が「評し得て妙」だの「ここところは見落とせり」などと答える形で、それに加えて悪口言いや、ひいき、読本好きらが主観的なコメントを入れるというものになっている。とは言え、結局のところ『犬夷評判記』は馬琴に都合が良いように編集されている。馬琴の言は言わば神の声として絶対のものであり、評者がどれだけそれに迫れるか、という形に仕上がっているからだ。

『去来抄』の「先師評」「同門評」には、右に記したような『犬夷評判記』における構成意識あるいは表現技巧が感じられる。もともと、『去来抄』における神は去来ではない。芭蕉が神である。それだけなら問題はない。問題は去来が

藤 沢 毅

芭蕉に次ぐ第二位の存在として、つまりは他の俳人たちより一段上に位置付けられていることである。

例えば、同門評（二十一）⁽²⁾は次のようである。

応くといへどたゞくや雪のかど 去来

丈艸曰、此句不易にして流行のたゞ中を得たり。支考曰、いかにしてかく安き筋よりは入らるゝや。正秀曰、たゞ先師の聞たまはざるを恨るのみ。曲翠曰、句の善悪をいはず、当時作せん人を覚へず。其角曰、真の雪門也。許六曰、尤好句也。いまだ十分ならず。露川曰、五文字妙也。去来曰、人々の評又おのく其位よりいづ。此句は先師遷化の冬の句也。その比同門の人々も難しとおもへり。今は自他ともに此場にとゞまらず。丈艸、支考、正秀、曲翠、其角、許六、露川の評に対し「人々の評又おのく其位よりいづ」との弁は、もはや師匠の弟子に対する感がある。しかも、芭蕉の亡くなつたところに同門の人に出来ないレベルの句を作った、という

記述を入れている。この箇所⁽³⁾に去来の強烈な自負を読み取る指摘は早くから出されている。

自説の正しさを主張するため、万人の師匠である芭蕉の言を利用するのは、去来に限らず、俳論を述べる者の常套手段である。だが、去来の場合、蕉門をまとめようとの意識ゆえか、既に他者よりも芭蕉に近い存在であることを示そうとしている記述が目立つ。この位置関係が提示される『去来抄』の構成が、『犬夷評判記』に類似した印象を与えるのではなからうか。

『去来抄』に対し、純粋な芭蕉の俳論と読むことを否定し⁽⁴⁾、去来の構成意識を読み取る方向で受け取ることは、既に先学の提起するところである。堀切実氏は『去来抄』のもつスタイルの特徴として「演劇的伝達の要素」「対話の場面性」「集団討議性」を挙げ、『去来抄』を「去来によって書かれた去来の俳論体系によるもの」と断定する⁽⁵⁾。さらに「人間関係において、去来はなかなかの遣り手であったのではなからうか」という推定も下している⁽⁶⁾。本稿では、堀切氏の論を踏まえながら、さらに徹底的に去来の作為や『去来抄』構成意識を探るつもりである。

一 先師評

『去来抄』の最初に位置する先師評はどのような始まり

方をしているか。最初の三項は全て芭蕉の句を取り扱ったものである。

まず「蓬萊に聞ばやいせの初だより」では、芭蕉の質問に去来が答えるという形だ。去来は芭蕉を満足させる答えを出し、「汝聞処にたがはず」「汝が聞る所珍重ト也」と誉められている。

一つおいて、三番目には「行春を近江の人とおしみけり」の句が上がり、やはり同様の問答があり、去来は「汝は去来、共に風雅をかたるべきもの也と、殊更に悦給ひけり」と芭蕉に激賞されることとなる。

さて間に挟まれた「辛崎の松は花より臙にて」の句に対する解説だが、ここでは伏見の作者、其角、呂丸、去来、による評釈がなされ、最後に芭蕉がまとめの形をとる。伏見の作者、呂丸は問題外だが、其角、去来に対しても芭蕉の「角・来が弁皆理屈なり。我はたゞ花より松の臙にて、おもしろかりしのみト也」と一蹴されたかのようなのである。しかし、注意して見ると去来の評中には「是は即興感偶にて」との言がある。結局これは芭蕉の言う「おもしろかりしのみ」に通じているのではないか⁽⁷⁾。ということは、少なくとも『去来抄』の中での書かれ方では、去来と芭蕉はそれほど遠い意見を述べてはいないのである。なお、この「即興感偶」は、第三句目の「行春を」の文章中での去来の評「殊に今日の上に侍るト申」に繋がり、さらに強調されて

いるかのようだ。

こういった内容を持つ三項が巻頭を占めることに意味がある。去来は最初に、自分が芭蕉に近い存在であることを強調しているのではなからうか。それは、蕉門俳諧を最も理解しているという意味でもある。

他の門人らと比べることによって、去来が芭蕉に近い存在であることを示している箇所もある。「此木戸や錠のさゝれて冬の月 其角(四)」では、此木戸が柴戸の誤読であったことが分かった時、凡兆が「柴戸・此木戸させる勝劣なし」と述べるのに対し、去来は此木戸ならば「其風情あはれに物すぐくいふばかりなし」と激賞し、芭蕉の「かゝる秀逸」との見方と一致している。

「田のへりの豆つたひ行螢かな(十三)」でも『猿蓑』撰において作者凡兆自身が「此句見る処なし」と言うのを、去来が誉め、凡兆がなおも拒んだのを芭蕉が拾う、という形をとる。結局、凡兆には分からなかったこの句の価値を、去来と芭蕉が認めたということになる。

「病雁のよさむに落て旅ね哉 はせを / あまのやハ小海老にまじると哉 同(十九)」の段でも、凡兆が後者を選んだのに対し、去来は後者は「予が口にもいで」るが、前者は「格高く趣きかすかにして」と前者を推した。後に芭蕉は「病雁を小海老など、同じごとく論じけり」と、同じ観点で比べること自体おかしいことを言うが、結局は

前者の方が優れているということであり、去来の意見の方が凡兆のそれに勝っていることは確実である。

「下京や雪つむ上のよるの雨 凡兆(二十二)」でも、芭蕉が置いた上五文字に対し凡兆は納得できない。芭蕉が「若まさる物あらば我二度俳諧をいふべからず」と強く主張すると、去来は「此五文字のよき事はたれくもしり侍れど、是の外にあるまじとはいかでかしり侍らん。此事他門の人聞侍らば、腹いたくいくつも冠置るべし。其よしとおかるゝ物は、またこなたにはおかしかりなんと、おもひ侍る也」と発言したことになっている。「是の外にあるまじとはいかでかしり侍らん」のみは芭蕉に譲っているが、それ意外では芭蕉同様の感覚で「下京や」を評価しているのである。「たれくもしり侍れど」の部分は、凡兆に対する強い批判の調子が読み取れるが、後半部は蕉門としての去来の自負が提示されている。

こうしてみると、右の四例ではいずれも凡兆が批判対象になっている(その他「つかみ逢ふ」の項でも同様)。芭蕉の声を神の声の如く設定することにより、去来自身を持ち上げ、凡兆を落とす形にしているのだ。凡兆意外の批判対象には、尚白(「行春を」の項)、信徳(「振舞や」の項、「大歳を」の項)などがあるが、凡兆にほど攻撃的ではない。意図的な操作を感じる。

こういった門人への批判は、基本的には俳論でのもので

ある。句作においては其角¹¹、越人、丈艸などのものを誉め、おのおのの力量を認めている。また、自らの拙い句作を認め悪い見本として取上げもしている。しかし、俳論に関しては、芭蕉に、時には叱られながら教えてもらう形をとっているが、他の門人と比べ劣るような書かれ方は一つとしてない。句作は譲っても、句の評論では決して譲ることない姿勢が顕れている。

「面梶よ明石のとまり時鳥 野水(十)」では、『猿蓑』に入集すべきか、すなわちこの句の評価について芭蕉と話し合いながら、とうとう押し切って自説を通すという強い去来の姿も窺える。¹² 俳論では芭蕉と同レベルにあるかのような書き方である。

句作に関しては他人に譲るような書き方をしているが、そうとばかりも言いきれない。もちろん自信作もあり、主張されている。「凧に二日の月のふきちるか 荷兮 / 凧の地にもおとさぬしぐれ哉 去来(六)」では、去来自身が荷兮の句に対し「予が句に遥か勝れりと覚ゆ」と、荷兮に劣っていることを認めるような弁が見られるが、その後すぐ芭蕉によって荷兮の句は「名目をのぞけばさせる事なし」とされ、逆に去来の句は「全体の好句也」と評価が逆転される。自ら謙遜しながらも、結局は芭蕉によって評価されるという書き方は、取りようによっては少々嫌味である。

去来の句を芭蕉が叱る例は多いが、師匠に教えてもらっているのだから当然ではあるし、また、それだけ直接教えてもらったとの自慢にもなる。また、俳論同様に、他の門人と比べて劣るとの書き方もされていない。そもそも去来の句は、「夕涼み疝気おこしてかへりけり 去来(三十)」のような初心者の頃のものまで入っている。師匠によって、叱責されたり、修正されたりしても、不名誉にはならないようになっているのだ。その一方で、他門人の句を例にして教える場面も描かれる。『去来抄』先師評だけを見れば、芭蕉は去来を一段高いレベルで教え、誇張した言い方をすれば指導者になる人物としての教え方をしているかのようにも受け取れるのである。

二 同門評

同門評の稿本には、各句の上にもその項で論争をしている門人たちの略称が記されている。どうも後に、あるいは推敲過程で書き加えられたものらしい。この部分まで去来の自筆によるのかは、意見が分かれそうである。ほとんど全てに「来」とわざわざ自分の名まで記していることから、疑問も生じるが、その名を他門人たちの下に置いている点から見て去来自身のものと取る。筆跡も似ている。とすればこれは、去来が同門評において、誰との論争なのか、と

いう点に心を向けていることを示している。言い換えれば、同門評とは、他の門人たちとの論争であり、去来が自説を主張している場だということだ。

さて、この同門評で去来と最も多く論を戦わせているのは許六である。去来が其角に送った書簡から始まった去来と許六の論争は、既に多く先学の論及するところであり、許六の『篇突』、去来の『旅寝論』、許六の『宇陀法師』を経て、その延長戦上に『去来抄』があることはほぼ認められている。しかし、『去来抄』の執筆動機そのものには、もっと強い許六への意識が存在するのではなからうか。『去来抄』には許六への直接の問いかけはなく、むしろ俳諧全体における問題を論及している感じが強い。しかし、同門評を熟視すると、その中に許六が関わってくるパターンが非常に多いことがわかるのである。

同門評に挙げられる項目を四十二とすると、その中で直接許六が登場してくる項は十三ある。これだけでも第二位の其角七回、第三位丈艸、支考の各六回に比べ格段に多い。そして、それらは書簡、『篇突』「旅寝論」『宇陀法師』などで言及されてきたことがほとんどである。

だが、これだけではまだ『去来抄』全体に関わる許六の影は少ないと言わざるをえない。問題は直接許六が登場しないにもかかわらず、許六との論争に関わる点が述べられていることだ。

まず、例として次の第六項を挙げよう。

馬の耳すぼめて寒し梨子の花 支考

去来曰、馬の耳すぼめて寒しとは我もいへり。梨の花とよせらるゝ事妙也。支考曰、何のかたき事か有らん。吾子の如く、かしらより一すじに謂くださんこそ難けれと論ず。曲翠曰、二子互二得処を易しとし、不得処を難しとす。其論共に尤也。しかれども惣体を謂ば、一すじに謂下さんは難かるべし。来曰、翠亦得られざる故也。凡修行は我が得処を養ひ、不得処を学ばゞ、次第にすゝみなん。得処になづんで外をわすれば、終に巧を成すべからず。

一見したところ、各自得意の事を育て、不得意の事を学べと言っているだけだが、この項は「取り合わせの論」と関わってくる。¹⁴許六は「自得発明弁」や『篇突』において、発句は取り合わせであるとの意見を提示している。それに対し去来は『旅寝論』において、芭蕉が洒堂に言った「発句は只金を打ちのべたる様に作すべし」などを引用し、芭蕉の指導は門人によって換えていたこと、ゆえに取り合わせは発句の一形態に過ぎないことを主張した。そこには曲輪の外と取り合わせた例として「馬の耳」の句も挙がっている。こうしてみると、「馬の耳」の句についての支考、曲翠との論も「取り合わせのみに囚われないように」と許六への意識があるのではないか。しかも、最後には謙虚な去

来自身の言葉があるが、その前に曲翠に「一すじに謂下さんは難かるべし」と言わせているのは、自分が取り合わせではないところで評価を受けていることを示しており、曲解すれば嫌味にもなりうる。

同様のことが次々項の「卯の花に月毛の駒のよ明かな許六（八）」にも言える。ここでは自分にも同趣向があつたが出来ず、「六が句を見て不才を嘆ず」と『去来抄』の中で唯一、許六の句を誉めている。だが、この句もまた『旅寝論』の取り合わせについての論の中に引かれた句であり、しかも先ほどの「馬の耳」の句の直前に並んである。とすれば、ここで許六の句を誉めているのも、その取り合わせのうまさに誉めたのであり、もっと悪く解釈すれば、「取りあわせはうまい」とも取れる。

「馬の耳」の項と「卯の花に」の項に、許六との論争の跡が見えることは、間に挟まれた第七項「白水の流も寒き落葉哉 木導」からも補強できる。『去来抄』表面上は、其角と去来の論争であるが、これまた許六宛去来書簡¹⁵に言及されている。許六は助詞・助動詞にうるさく、その面でも去来と随分論議しているが、この書簡では其角評を挙げ、対する自説を述べている。許六がどう答えたかはわからないが、おそらく其角説を採つたのではあるまいか。

こうして見ると六、七、八項はセットになって、どれも許六への意識を感じ取れる。しかも去来は配列にも心を

配っていたのではないかとの想像が湧く。

とりあえず配列に関しては置いておき、許六への意識の例をもう一つだけ取り上げよう。第十一項の「鶯の身を逆にはつね哉 其角 / 鶯の岩にすがりて初音哉 素行」に関する論議である。これまた、表面上には許六は現われない。二つの句を例に、本意や本性を失つてはいけなことを説いた項である。だが、許六は既に「自得発明弁」や『篇突』において其角のこの句を激賞し、対して去来が『旅寝論』の中でその許六の弁を非難している。やはり許六への意識はあるのだろう。其角個人は「技巧的であり、効果を狙つて虚構をも認める」という姿勢を持っていたが、もちろん去来の嫌うところであり、蕉門として認めないものであつた。

表面上に現われない許六の姿は、他に第十六「電の」、十九「鞍坪に」、二十八「門口や」の項にも見られ、考察をすすめればさらに増えるであろう。このような例を合わせるに、許六との関連項は同門評の中で十九になり、これはかなりの数字ではないか。去来の『旅寝論』は、『篇突』における許六に対して反論を述べたものであつた。しかし、許六はなおも『宇陀法師』の中で自説を主張する。そこで去来は、もっと冷静に、直接許六に訴えるのではなく、蕉門全体をまとめるような形式の俳論書を記そうと目論んだのではなかつたか。『去来抄』全てが許六の説に関連しているわ

けではない。ゆえに『去来抄』は許六に宛てた俳論書ではない。だが、『去来抄』執筆の動機には、許六の存在が大きく関わっていたのではないだろうか。

三 去来の操作、構成意識

同門評における許六関連項は、全体の中で実によく分散されている。どうもこれは意図的なものと思える節がある。同門評に許六関連項が多いのは前章に述べたとおりだが、先師評に許六が登場するのはたったの二回、それも終わりの方である。第一章では専ら芭蕉に近い去来像を作りあげていったようだ。その許六が登場する先師評第三十六項は次の三十七項とセットである。つまり、許六が評価した「舟に煩ふ西国のむま」を芭蕉は「いまは手帳らしき句も嫌ひ侍る」「長あるべからず」とはねつける。一方、去来が自作の「弓張の角さし出す月の雲」の句を、これも手帳ですかと尋ねたところ、「手帳ならず」と芭蕉の評価を受けている。他処にも見られる、このセット感覚も去来の構成意識を表しているが、芭蕉によって許六を落とす、去来を持ち上げるこのセットが先師評の終わり近くに置かれているのも、同門評へと繋げる意図が働いていないだろうか。

『去来抄』は各項が割と無造作に記されている感もある。それは『旅寝論』などと比べ説明が少ないせいであろう。

だが、去来の意図的な操作は各項でも行われている。例えば同門評第二十項の「夕ぐれは鐘をちからや寺の秋 風国」の句では、実際には風国が鐘の音を寂しくないものと聞いたのは「ちかき辺にて聞」いたためだということが、土芳宛書簡¹⁶に見えるが、『去来抄』では「一端遊興騒動の内に聞」いたためと変えている。飯田正一氏が『蕉門俳人書簡集』¹⁷の中で述べているように、これは本意を大切にするという主張が説得力を増すようにとの操作があつたものと見る。書簡などから見える事実と、『去来抄』の中の記述が相違していることは他所にも多く、記憶違いかなどと評されることがあるが、去来の意図的な操作も加わっていることは確実である。

このように『去来抄』を読んでいくと、これまでとは少々違った去来像が浮かんでくるようだ。もちろん、去来は篤実の人であり、その人物評価は大きく変わらないであろう。去来は芭蕉に忠実であり、自分が理解した蕉門俳諧の理念を必死になって説こうとした。その意味では『去来抄』も誠意を持って書かれている。しかし、『去来抄』は自説の俳論を主張したものであり、そのためには構成などかなり操作が存在するのではなからうか。本稿では詳しく言及できなかったが、テーマ順になつていない、各項目の並ぶ順番もこの視点からよりはつきりするであろう。

去来は芭蕉の俳論を受け継いだとの自負があった。ゆえに、句作では譲つても俳論では決して譲つていない。『去来抄』の中で、他者の句を去来自身が誉めることはあり、自分には作れない句だと謙遜することはある。しかし、俳諧理念では自説を曲げず、主張した。ここには芭蕉亡き後の蕉門を自分がまとめていこうとの意識がある。だからこそ、一番の論争相手許六に対して直接的な主張を避け、むしろ文辞の上では許六の名をある程度隠すような操作をして、冷静かつ客観的な描写で『去来抄』を記していったのではないだろうか。

注(1) 本稿では「先師評」「同門評」を取り上げて『去来抄』の考察をする「故実」「修行教」については、去来自筆稿本が現存しないこともあつて、筆者の頭の中でその位置付けが未だ確定できないゆえである。

(2) 便宜上、「先師評」「同門評」それぞれの中での項目配列順を記しておく。なお、本文の引用は、基本的には大東急記念文庫『去来抄複製 附解説並積文』(昭和33)による。ただし私に、濁点、句読点等を補い、片仮名を平仮名に変えた。

(3) 例えば岡本明氏『去来抄評釈』(三省堂、昭和24)。

(4) 楠元六男氏は「去来の執筆態度——『去来抄』理解のたの一検証作業」(『国語国文論集 学習院女子短大』第

20号、平3・3)の中で、『去来抄』中の三項目における、芭蕉の真意と去来の理解の誤差を指摘している。

(5) 『去来抄』解釈の一視点——「先師評」「同門評」から——(『近世文学論集——小説と俳諧——』所収、昭和46)

(6) 『芭蕉の門人』(岩波書店、平成3)

(7) 山下登喜子氏は、去来の「即興感偶」と芭蕉の「我はたゞ：おもしろかりしのみ」の相違点を綿密に検討された『去来「即興感偶」論——辛崎の松は花より臈にて』(『蕉門俳詣論考』(平成元・笠間書院)をめぐって——)『蕉門俳詣論考』(平成元・笠間書院)所収)が、ことはもつと単純なのではないか。

(8) 凡兆が納得しなかったのは、芭蕉の修正が気に入らなかつたゆえとする考えも指摘されている。

(9) なお、この項で凡兆は「おもへばとしの敵哉」の上五文字に「大歳を」とつけ、芭蕉に「誠に是の一日千年の敵なり。いしくも置たる物かなと、大笑し給ひけり」と誉められているように書かれる。しかし、ここでは上五を付けた機智を誉めたのであり、句作全体を誉めているわけではない。これまで取り沙汰されている芭蕉の笑いについても、やはり、苦笑や嘲笑なども含む「笑い」と取るべきであろう。

(10) 塩崎俊彦氏は『去来抄』における凡兆らを、「教育的言説」の中の「正しい」論理から逸脱する者として排除

されるべき対象」と捉えている。「『去来抄』の政治学」
『文教国文学』26、平成3・3。

(11) 「切れたるゆめはまことかのみのあと(十七)」の項の
ように、従来の解釈が分かれる箇所でも、この去来の表
現技巧というフィルターを意識して見れば分かりやす
くなる。去来の「其角は誠に作者にて侍る。わづかにの
みの喰つきたる事、たれかかくは謂つくさん」と言うの
は決して誉め言葉ではない。他所であればほど、技巧的す
ぎる句を嫌う弁を見せていることから明らかである。

芭蕉にも「さしてもなき事をことごとくしくいひつらね
侍るときこへし」と言わせている。ネックになるのは
「かれは定家の卿也」とのセリフで、定家を尊敬してい
た芭蕉が否定的な意味で「定家」を使うかという問題だ
が、『去来抄』は去来の文であることを考慮に入れれば
解決する。芭蕉が実際にこのセリフに近いことを口に
したとしても、この文から受ける印象とは異なったも
のであったかもしれない。

(12) 『旅寝論』に比べ、その意を強調する形をとる。

(13) 母利司朗氏は『宇陀法師』が『旅寝論』を強く意識して
作られたことを指摘している(『国文学解釈と鑑賞』平
成5・5、至文堂)。

(14) 堀切実氏「取合せ論の検討」に詳しく言及されている
(『江戸人物読本 松尾芭蕉』平成2、ペリかん社)。

(15) 元禄八年一月廿九日付。

(16) 元禄八・九年頃筆。

(17) 昭和47、桜楓社。